

「国語科ノート指導研究」より ノートの機能と指導の意義

宮下 真弓

はじめに

「大切なノート」。そう呼べるノートを皆持っているだろうか。あるいは、持っていたことがあるだろうか。大げさかもしれないが、自分の歴史や過去の記憶さえも持ち、思い出させてくれる力が、ノートにはあるのではないかと思う。その力は、日記帳や作文帳のようにすぐに記憶と結びつくものだけではなく、授業用のもの、宿題の練習帳、ちよつとしたメモ帳などにもあると思う。人によって大切なノートというのは様々だろうが、「失いたくない」という共通の思いがあるのではないだろうか。私には、大切なノートが何冊かある。一つは、知識を得るためのものである。一つは、心に残る言葉を鮮明に思い出すためのものである。書いて残さずとも、記憶にとどめておけばよいのではないか、という人もいるだろう。しかし、人の記憶は万事において確かであるとはいえない。いつの日か必要でなくなるときまで、大切に持っていたいと思ってもよいだろう。

今は、大切なノートを手放すことなど考えられない。もしも、災害などでそのノートを失ってしまったら、そこに書かれている知識や言葉までも失ってしまう気さえする。

今の私は、ノートに書くことが好きである。時には、書かないと不安に思うこともある。ノートは、私にとって、大切な学習記録帳であり、忘れないためのメモ帳であり、好きなことが書ける発想自由の場でもある。小・中学生の頃は、落書きばかりしていた覚えがあるが、高校生になるころから、私にとっては落書きやイラストも、自分オリジナルのノートづくりに必要なこと・生かせることであると感ずるようになった。書きたいことが書け、自分で満足できるものができたときは、とても嬉しく思い、分かりにくいと気に入らず、授業が終わりに帰ってからまとめたおすこともあった。学校では、授業別に数冊使用していたが、それ以外にも、宿題用、テスト前にとまとめる用などを用意し、それぞれに費やす時間、書く内容、構成なども異なっていた。ここまで書くと、昔からノートが好きだった

ように思われるかもしれないが、正直に言うると、小・中学生の頃は特に「授業中」に書くことが苦手で、「とりあえず書けばよい」という授業態度だった。家庭で書き直したりまとめたりすることの少なかつた「国語」では、破ったページや落書きだらけのページもあり、今見ると恥ずかしくなってしまうほどである。なぜ苦手だったか考えると、「何を、どのように書けばよいかわからなかつた」からであるように思う。しかし、今までに何度もノートをありがたく思うことがあり、書く楽しさを味わうことがあつたのも確かである。

大学生時代は、使用する数は大幅に減つたが、かえつて使用の仕方個人差があることがわかるようになった。小学生・中学生の頃は、他人のノートにあまり関心がなかつたし、高校生の頃は、テストのために板書や教師の言葉を書き取るようなもので、書き方を工夫する以前に書き取ること必死になつていた。しかし、今考えてみると、何度もノートに書くことを繰り返しているうちに、いつのまにか「自分なりの書き方」がきまつていた。授業中に友人のノートへの取り組み方を見てみると、同じ授業を受けていても、書き方や書く量など人それぞれであつた。ノートをとるかとらないかは、授業の内容や形態によつて変わり、書く必要がある場合とそうでない場合もある。それだけではなく、ノートに対する教師の意識・個人の意識によつても変わつてくる。使用の仕方や意欲は、通つてき

た学校やクラスでの指導にも影響されているのだからと思う。既に知っていることを聞いた時に書く・書かない、新しく学んだこと、頭の中で考えたことを書く・書かない、人によつて知識の量や書くことの必要感異なるため、個人差は、あつて当たり前である。しかし、大切なことがあつても全く「書かない」ようなことは、私にとつては信じられないことで、現在教師となつた立場からも、身に付けるために書いておいてほしいと思う。

本論文は、私が信州大学教育学部在学中に、「教職に就けたならば、子どもたちにもノートを使う機会を与えたい」と考え研究したものである。中心となる三つの章では、「ノート指導の意義と現状」「実践から見るノート指導の方法と評価」「ノート指導と板書」について扱つたが、全て載せることもできず、また各章から少しずつ抜粋して十分に意味の通るものにする力もないため、第一章第二節「ノートの機能と指導の意義」を中心に抜粋させていただきたいと思う。

第一章 ノート指導の意義と現状

第一節 国語教室におけるノートの定義

国語教室において、「ノート」というと、縦書きのものを思い出す

人が多いのではないだろうか。日本語の文字は、ローマ字を除いて縦書きに書く文字の構成になっているから、昔の書物を始め、現在でも国語の教科書や文学作品など、国語に関するものは縦書きの物が多い(＊)。小学校では、書く文字が大きいこともあり、縦書き専用のノートを使うことが多く、また、中学・高校においては、幅の狭い横書き用大学ノートを使う場合であっても、国語では縦書きにすることが多い。しかし、ノートは、決められた書き方でなければならぬということはなく、目的や用途によって、国語教室においても横書きをすることはあるだろう。国語科以外ではすべて横書きであることから、子どもたちには、縦書き・横書き両方のノートの使い方を経験させ、身につけさせる必要がある。国語教室では、縦書きを中心としつつ、様々な書き方を取り扱うべきであろう。(＊なぜ国語は縦書きかについては、卒業論文末の付録に載せてあるが、ここでは省略する。)

いずれの書き方にしろ、「ノート指導」において指導の対象となるのは、初めから冊子となっているものばかりではない。ルーズリーフや教師が用意した学習カード(学習プリント)等、授業の中で児童・生徒が書きこむ等の活動に使用し、ファイル等に綴じることができるものも指導の対象となる。学習カードは、「ノート」という名

称では呼ばないが、学習の中で記録、まとめ等に使用される点、書かれたものをもとに評価・指導ができる点から、「ノート指導」の対象になるといえることができる。また、学習カードは、教師の意図によつてあらかじめ学習課題や授業の流れ、板書の一部などを印刷しておくこともできれば、枠のみにしておくこと、真っ白な状態にしておくこともできる点で、様々な取り組み方の可能性として注目すべきである。

『国語科学習指導の改善と課題』(渡辺富美雄(一九八八年五月 国土社)では、次のように述べられている。

「学習ノートは、特に、決められたものでなければならぬといふものではなく、むしろ作っていくものである。一般的にノートは冊子としてまとめられ、一つの様式、すなわち、野線によるもの、原稿用紙の方式によるもの、無野のものなど様々であるが、それらのノートを使わなければならないということはない。教師が目的やねらいによつて、学習の都度、工夫された用紙を使って学習し、それをまとめて、ある時期に冊子に仕上げるなど工夫することもある。学習ノートは、いずれにしても子供一人ひとりがつまみ、教師が用意した学習カード等であっても、子ども一人ひ

国語用ノート

方眼ノート	マス数(縦)	列数×行数	行数	列幅
	8マス	×8	12行	表記なし
	10マス	7×10	16行	
	12マス	8×12	17行	
	15マス	10×15		
18マス	12×18			

漢字練習帳	字詰め	列数×行数	字詰め	列数×行数	主に中学校で漢字練習帳として使用される。学校によって指定される場合がある。
	50字	5×10 十字リーダー入り	234字	13×18	
	84字	7×12			
	100字	8×13 (3字分日付記入欄)			
	150字	10×15			
	200字	10×20			

作文帳	字詰め	列数×行数
	120字	8×15
	200字	10×20

① 小学校(国語)ノート

② 漢字練習帳

③ 作文帳

②使用目的からみて

- ・市販ノート(A4、B5、A5)
- ・綴じ込み式(ルーズリーフ、カード)など
- ・学習ノート
- ・漢字練習帳
- ・作文帳
- ・読書ノート
- ・観察ノート
- など

とりの手によって「ノート」へと変わっていくことができるのである。
ノートの種類と用途
ノートは、形状と使用目的によって分類することができる。現在、市販されているノートの種類は多く、用途や対象年に応じ様々な種類のものがあるので、その一部を紹介したい。

第二節 ノートの機能と指導の意義

序章の中で、石盤に代わってノートが出現したことについて述べたが(＊)、初めのうちは、ノートも石盤と同じように練習学習のために使用されていた。その後、石盤との大きな違いである「記録性」を生かして、教師に教えられた事項を忘れないために、備忘録的に書き留めておくような使用も行われるようになったのである。

時代が変わり、子どもの自発的、自主的な学習が重視されるようになると、教えられたことの記録からさらに進んで、自分で調べたことの記録のために活用し、復習や合同学習の際に役立てようという考えが生まれた。同時に、「書く過程」そのものを生かし、書くことによる気づき、思考の整理を得ようとする探求的学習のための利用にも目が向けられるようになった。これらは、子どものノート活用の立場からみた機能であるが、教師の授業研究の一分野としてもノートは注目されてきている。

学校現場において、ノート指導をすすめるにあたって、教師はその機能と指導の意義を知っていなければならない。機能を知らずに使用すれば、効果的な指導は期待できないし、指導の意義を理解しなければ、積極的な指導は行えないからである。本章では、まず国語教室におけるノートの用法例や様々な文献から、ノートの機能と

指導の意義を探り、それぞれについて考察していきたいと思う。

(* 序章は省略した)

一 「ノートの機能」と「ノート指導の意義」の言葉の定義

まずは、「ノートの機能」と「ノート指導の意義」という言葉について定義しておきたい。様々な文献において、これら「機能」や「意義」は、言葉や説明を変えてとりあげられているが、著者によってとらえ方や説明方法があまりにも異なるために、いまいちはずきりしない。機能と意義を同義で扱っているものもある。共通するのは、ノートがいかに学習の助けになるか、ということである。そこで、文献をもとに、私自身で一度定義をしておくことにする。

ノートは、書き手が存在して初めて機能するものである。道具としてのノート自体は、もともと「書かれる」ことしかできないが、書き手がノートに書く(ノートする)ことによって様々な機能を持つことができるのである。そこで、「ノートの機能」といったときには、必ず書き手が利用することを考え、

学習者が「ノートに書く」という行為の中でノートが果たす役割。

と定義する。そして、この役割は、ノートの用法から探ることができらるであろう。

一方、ノート指導の意義とは、教師が子どもにノート指導を行うことにどのような価値があるのか、ということである。つまり、子どものノート学習に価値を見出した場合、

① 学習者がノートを用いた学習を行うこと、指導を受けることによつて、どのような力や態度を身に付けることができるか。

ということになる。

また、教師が授業研究のためにノートを利用する立場から価値を見出そうとした場合、

② 教師が子どものノートをどのように活用できるか。

ということになる。

指導の意義は、ノートの機能を生かして考えられるため、両者はとても深い関係にあるといえる。

二 文献からみるノートの機能

ノートの機能とは具体的に何であろうか。学習者が「ノートに書

く」という行為の中でノートが果たす役割。と定義したことをふ

まえ、いくつかの文献を比較検討した結果、本論文では、機能を次

の三つであると考えることにした。

「記録」 (記録の場としてはたらく)

「訓練」 (訓練の場としてはたらく)

「思考」 (思考の場としてはたらく)

(卒業論文では、三つの機能を定義するにあたって参考とした文献より、重要と思われる箇所を抜粋し、考察を加えたが、ここでは省略する。)

三 本論文におけるノートの機能

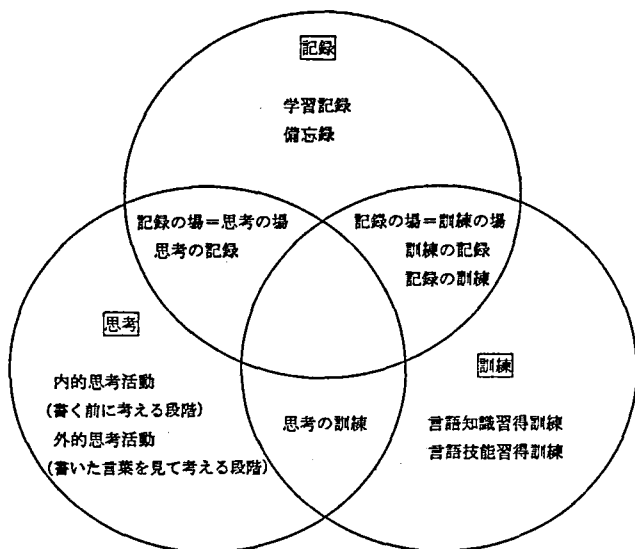
本論文では、第二節第二項の冒頭で紹介したように、ノートの機能を大きく「記録」、「訓練」、「思考」の三項目に分類した。なぜ三つに分けたのか、その理由を述べる。

ノートはとにかく書くことが基本であり、訓練も記録も書くことに変わりはない。ノートを思考活動の場として利用したとしても、その思考結果は書くことによつて見えるかたちであらわれてくる。書いたものすべてが記録として残るのであれば、大きく機能を「記録」一つとしてとらえ、そこから下位項目を枝分かれさせるかたちで考えることもできた。しかし、あえて機能の三項目を作ったのは理由がある。

それは、活動によつて中心となること、目指すことが大きく異なつてくるということである。「記録」は、学習内容にしる、思考の内容にしる、記録として残すことが目的であり、後に活用することも考えたうえで記録する。「訓練」は、結果として記録に残るとしても、国語の力である言語知識や言語技能を身に付けようという目的を持つてすべきものであるから、記録という言葉では表わしきれない。繰り返して学習する、ということが重要なのである。「思考」は、「書くために考える」、「書きながら考える」、「書いたものから考える」というような、書く行為と同様に思考することが中心となる活動を想定し、一つの項目とした。思考を記録する、思考を訓練する、ということもあるため、「思考」という項目を立ててもよいか迷ったが、「言葉で思考する」、「書くことは、考えることである」という言葉があるように、我々が文字や文章を書くときには、ほとんどの場合思考を伴うことから、重要項目としてあげるべきであると考えた。

次に示す図は、今回新たに定義した三つの機能を表したものである。「機能」、「訓練」、「思考」という円が三つあるが、互いに重なりあつていることに注目していただきたい。「記録」、「訓練」、「思考」という三つの機能は、独立しているのではなく、それぞれが互いに連鎖あるいは重複していることを示している。

ノート学習におけるノートの機能



図「ノートの機能」の内容

① 記録

- ・ 学習記録：授業、自主学習の記録。
- ・ 備忘録：(メモ)ふとしたときに浮かんだ考えの記録。疑問点などのメモ。

(重複箇所)

- ・ 思考の記録：思考の跡を記録して残すことが目的／書くことで思考を深めた結果記録として残る

② 訓練

- ・ 言語知識習得訓練：文字・漢字・文法・筆順・書式などの知識を身に付ける。
- ・ 言語技能習得訓練：文字の読み書き能力・視写力・聴写力など、知識を実際に使う力を身に付ける。

(重複箇所)

- ・ 思考の訓練：思考する機会を増やし、思考力を訓練することが目的／思考する経験が訓練となる

③ 思考

- ・ 内的思考活動：書く前に、どのようなことを書こうか、頭の中で考えること。

(書くことによる表現以前の段階　まだ文字としてあらわれず潜在している段階)

← 繰り返し →

・外的思考活動：考えを文字で表現すること。

(書くことによって表現する段階　文字としてあらわれ顕在化している段階)

— 内的思考と外的思考について —

思考とは、頭の中で行われるものである。したがって、思考する、といったときには、普通「内的な思考」を意味する。ここでも、頭の中で考えている状態の思考、潜在していて目に見えないでいる思考を、「内的思考」とする。うまく言葉で表わしていないが、考えている、というようなものも内的な思考である。一方、文字化する以前の思考を内的の対し、「書く」ことによって、文字表現としてあらわれた思考は外的ということが出来る。内的思考は文字化することで外的思考となるのである。ノートには、思考の跡や思考の変化を残すことができるが、これは、文字によって目に見える形で思考が進められているといえる。このように、思考を顕在化させることが「外的思考活動」であると考える。

頭の中でうまくまとまらずにいた内的な思考を、ためにしにノート

に書いてみる(外的思考にする)。すると、そこに書かれた言葉や文章から内的な思考がさらに進み、何か新しいことに気付いたり、考えが深まったりすることがある。ノートを思考の場として利用する時、人は常に内的思考と外的思考を繰り返しているのである。ノートに書くということは、書く以前の内的な思考とともに、外的な思考を深めることなのである。

三つが重複するのは、それぞれの機能が他の機能の副次的なものとなることであるからである。例えば、言語技能は、繰り返しの訓練によって高まるものであるが、訓練というのは、初めから言語の習得を目的として行われる、宿題や書き取り練習だけではない。授業において学習の記録をとるような、記録することが中心のものも、実は訓練の場になっているのである。逆に、訓練が目的で書いたものを、記録として残すこともできる。「記録」は「訓練」にもなり、「訓練」は「記録」にもなるのである。「思考」も、中心は思考することであるが、思考の内容を記録すれば「記録」になり、思考自体を「訓練」することもできる。逆に、「記録」、「訓練」の場で、思考することもある。

また、活動自体が段階的に行われることや同時に行われることもある。例えば、授業の中で、学習課題を視写する(ノートは記録の

場として機能する) ↓課題について考える(思考の場) ↓学習のまとめを書く(記録の場)といったように、活動に応じた段階的に機能することや、日記や作文を書くときに、すべてが同時に働くこともあるのである。(段階的に機能するときも、その場面での中心的な機能は変わるが、考えようによっては常に重複しているとも言える。)

以上のことから、ノート機能の三本柱を、重複せずに分類することはできないと考えている。しかし、ノートを用いた活動をするときには、常に何を目的とするかを明らかにし、ノートの機能をうまく活用すべきである。

四 ノート指導の意義

本論文では、ノート指導の意義を次のように定義した。

○子ども側から：学習者がノートを用いた学習をすること、指導を受けることによって、どのような力や態度を身に付けることができるか

○教師側から：教師が子どものノートをどのように活用できるか

以上の定義を前提に、ノートの機能「記録」、「訓練」、「思考」の中から、どの機能を中心に生かせるかを考えながらノート指導の意

義について述べる。

(児童側から)

1. 自ら学ぶ力をつけることができる。学習方法を学ぶことができる。「記録」

記録は、ノートが果たす役割の中で最も代表的なものである。一度書き込まれたものは、消さない限り半永久的に残り、何度でも見返すことができる。ノートを学習記録として使用すれば、学習個体史として残り、学習者一人ひとりが何を学び、何を考えてきたか振り返ることができる貴重なものとなる。後に推敲を加えることができ、予習・復習にも用いることができる。学習記録、読書記録、思いついた言葉などをメモしておける備忘録などは、個人の努力次第でいくらでも増やすことのできるデータバンクであり、学習の充実感や満足感を視覚で感じやすいため、子どもにとってやりがいのあるものである。教師から見ても、有効利用すれば子どもの学習意欲を引き出すことが可能である。

また、ノートに学習記録を残す習慣が付くと、ノートには自然とノートの取り方や学習の方法があらわれてくる。ノートの取り方の授業を行えば、その時のノートは後の参考となる。教師の工夫され

た板書を写したのも、学習の進め方の手がかりとなる。授業の記録を正確に取ることができれば、勉強の仕方がわからなくなったときには、ノートを見れば、それまでの授業でどのようなことを学んできたか、別の単元ではどのような方法で課題を解決したかといったことがわかるのである。

ノートがあれば、学校でも家庭でも自主学習ができる。学び方がわかり、学習に充実感を感じることができれば、自ら学ぼうという意欲がわくのではないだろうか。読書記録、興味を持った言葉、自作の詩など、国語に関することなら何でもよいだろう。自ら進んで学習をし、それをどんどんノートにためていってほしいと思う。それを教師が認め、支援することで、子どもたちのノート利用、自主学習を活発にできるのではないかと考える。

2. 学習内容を理解する手助けになる。

「記録」「思考」

ノートは、学習内容を理解する手助けとなる。理由は三つ考えられる。

一つは、「記録」をもとに復習し、再び考えることや疑問点を確認することなどができるということである。自分の考えを確認しておけば、次時の授業に入りやすく、疑問の答えも見つけやすいであろう。

う。授業のノートをもとに、考えながらノート整理をすることが、効果的なテスト勉強になるという話もある。せっかく学んだことや自分で考えたことも、記録しておかなければすぐに忘れてしまう。子どもたちに、記録を残し活用する習慣が身に付くよう、教師が子どもの記録を授業の中にも取り込むことなどができるであろう。

二つ目は、書くことで集中することができるということである。書くことは、意識せずにはできないため、ノートを取ることが、授業に集中せざるをえない態度をつくる。集中すれば、自然と理解は増すのである。ただし、ただ写せばよい、書けばよいといった姿勢で機械的に書く場合は、ほとんど思考を伴わないため理解も進まない。かえって、手を動かさずに真剣に見たり聞いたりしていたほうが理解できる。書く分量が多すぎても、時間がかかるばかりで、内容理解の助けにはならない。適度に書く機会を設け、集中することができるような授業作りをすべきである。いい加減な授業態度では、ろくなノートがつかれないことは子どもたちにもすぐにわかるであろう。ノート回収を行うことも、よい刺激になるであろうと思われる。

三つ目は、書くことは思考を促進するということである。特に、自分の考えを書くためには、必ず考えなくてはならない。考えたことをもとに、さらに考えることもできる。学習内容を理解するのに

一番よい方法は、自分で考えてみることである。教授された知識や考え方を見て理解したつもりでも、実際にはほとんど理解できていないことが多い。自ら書き、考えることが理解へと繋がるのである。

3. 書く習慣を身に付けることができる。

「記録」「訓練」

ノートは、学校教育の中で、一番書く機会の多いものである。書く習慣が身に付けば、必要なことを自然に書けるようになり、書くことを面倒臭いと思わなくなる。ノートを取ることが好きな者には、文章を書くことへの抵抗感があまりないことが多い。書くことをおっくうがらない態度は、学校生活だけでなく、社会に出てからも非常に大切な能力である。現代社会は、手書きよりもパソコンで文書を作ることが主流となつてはいるが、いくらパソコンが使えても、文章を作ることができなければ意味がない。書くことができるということは、文章をつくる能力があるということである。授業参観などで感じたことは、「自然な書く機会」が多く設けられていれば、子どもたちも自然に書くことができるようになるということである。ノートによつて、書く習慣を、そして書く能力を身に付けさせることができるであろう。

4. 思考の停滞を防ぐことができる。

「記録」

ノートはメモすることによつて思考の停滞を防ぐこともできる。文章を書くときに、漢字や文脈に合った言葉が思い出せない、そこで思考が停滞してしまうことがある。家庭学習のように時間に余裕のある時ならば、思い出す、調べるといったことも可能であるし、思い出そうと頭をひねることや自ら調べることで自体が学習となるため、思考の停滞はさほど支障にはならない。しかし、大勢の学習者が一斉に同じ活動を行うことの多い授業では、個人の思考だけに多くの時間をかけることはできず、どんどん先へ進まなくてはならない。一度思考がとまると、次の活動へ進めず、授業に遅れてしまうこともある。筆が進まない、授業内容や活動内容が理解できていないのではないかと教師に誤解される恐れもある。その場で分からないことはメモしておいて、後で調べられるという利点を、ぜひ生かせるようにしたいものである。児童・生徒の中には、ノートをきれいにすることに執着し、速く書くこと、欄の内外にメモすることを嫌う者、頭の中できちんとまとまるまで書き出せない者などもあるだろう。早い時期からノートの使い方に慣れさせ、メモすることでもノートが汚れる、枠からはみ出て汚い、という意識をなくすことも大切である。教師が授業中に机間巡視を行い、「メモしておいて後

で調べてみよう。」ととりあえず今考えていることを書き出してみよう。」といった言葉がけを行うとよいだろう。

5. 国語学力(言語技能+言語知識+情意力(態度)の統一的な力)を高めることができる。「記録」「訓練」「思考」

言語知識…「記録」 言語技能…「訓練」 情意力…「思考」

ノートの使用方法は、とにかく「書く」ことが基本であるため、ノートは、学習者にとつて常に言語知識・言語技能の修得の場となっている。ノートに書く行為そのものが訓練となり、書く活動の場を増やし、結果として言語知識や言語技能を修得することができるのである。訓練の機会として頻繁に行われる活動は、低学年の「五十音の書き取り練習」や各学年の「漢字練習」等、初めから文字力、漢字力などを身につけることを目的とした活動であるが、毎時間の授業の中でノートをとること(記録すること)、家庭学習で文字を書くことなども、立派な訓練の一つになっている。ノートによって、言語に関する知識を得る、それを実際に使う、ということを繰り返し、言語知識・技能を身に付けることができるであろう。

情意力については、「学習内容を理解する手助けになる。」の中にも述べたが、ノートは学習者の意識を授業に向ける役割も果たすこ

とができる。授業中、何気なく過ごしていると、何も記憶に残らなかったということがある。これは、授業へのぞむ際に何も目標を持っていないためである。ノートをとることは、無意識にできることではなく、黒板や教科書を見て書く、教師の言葉、友人の発言などを聞いて書く、考えて書く、といった力が必要である。ノートを取ることを意識していれば、自然と授業に集中する態度が育つと考えられる。

6. 思考力をつけることができる。「思考」

ノートは「書く」ことが基本であり、書くことは、学習者の思考を促進し、また、授業への集中を促すこともできるということは、先に述べたとおりである。

表現には、音声表現と文章表現があるが、ノートには文章表現があらわれる。もちろん表現そのものも国語の力として重要であるが、表現すべき物事や事象をどのように理解し、どのように自分の考えとしてまとめ上げるか、というような、表現しようとする思考活動も重要である。「書くことによって考える」ということがあるが、その中にも「書く前に考える、書きながら考える、書いた後考える」というように様々な思考活動が考えられる。書くことは、すなわち

思考する機会でもある。

例えば、考えはまとまっていなくても、とりあえず書いてみる、そうすると、頭の中だけではまとまらずに漠然としていた考えが、書くことによって次第に明確になり、考えがまとまっていくということがある。文章で自らの考えていることを表そうとするとき、人は言葉で思考する。書くことで、頭だけでなく視覚でも言葉を身近に感じることができると、思考が促進されるのであろう。頭の中で考えただけのことを発表したり、ふっと思いついたことを発表したりすると、話しているうちに自分の考えがあいまいになって、意味がわからなくなってしまうこともある。一度、書く事によって自分の言葉で表現し、自分の考えを確認することは、人前で発表する時にも大いに役立つことである。ノートは、思考を整理し、深化させる。メモするだけでもだいぶ違うものである。

(教師側から)

ノート指導は、教師にとって次のような意味を持つと考えた。

①子どものつまずき、考え等を把握し、次時の授業の資料とすることができるとができる。

②自己の授業評価の材料とすることができる。

③学習の個別化ができる。個を生かすことができる。

④身に付けてほしい大切な事項を全員に記録させることができる。

(学習内容の定着に繋がる)

⑤書写・作文の下地、定着に役立てることができる。

①②は、子どもが書いたノートをもとに可能となり、③④⑤は、ノートを用いた指導によって可能となる。

①子どものつまずき、考え等を把握し、次時の授業の資料とすることができるとができる。

授業の中で、子ども一人ひとりの学習に対するつまずき、思考の変化等を把握することは難しい。教師は子どもの発言や吹きによって、どこに困難を感じているか、どのような考えが生まれたかを多少は知ることができるとは、発言をすることが苦手な子どものつまずきや良い考えは発見しにくい。そこで役立つのが子どものノートである。よく、子どもたちに考える時間を与え、教師が机間指導で子どものノートをチェックすることがあるが、「一人ひとりの子どものつまずきや考えを知るのにとってもよい方法であると思われる。机間をまわる中で、多くがつまずいている箇所やよい質問などがあれば、全体への注意点として取り上げることができると、机間指導は個別指導の良い機会でもあるから、個々のつまずきにも対応することが

できる。ノートからよい意見をいくつか選んでおき、意図して指名し、発言の機会を設けることもできるのである。

また、子どものつまずきや考えが記されているノートは、次の授業の資料として活用することができる。子どもが書いた意見や感想から、授業の理解度を把握し、授業の進め方を変えることもできれば、ノートに書かれた子どもの意見を授業の中で取り上げることができる。特に、子どもの意見を取り上げるとは、授業への意欲・関心を高める効果があり、教師が学習課題を出すのではなく、ノートから取り上げた子どもの意見から課題が導かれれば、教師による押し付けでない自然な流れの授業が成立するのである。子どものノートを有効利用するためには、教師が労力を惜しまず、回収・点検・評価を繰り返す、資料として保存、活用することが必要であろう。

②教師による子どもの評価・教師による授業の自己評価の材料とすることができ。

評価材料としてのノートを考えるにあたり、診断的評価、形成的評価、総合的評価という観点から考えたいと思う。これらは、授業の時期に応じた評価であるが、ノートはどの時期での評価に役立てることができるのであろうか。――は教師による子どもの評価、

――は教師の自己評価

まず、三つの評価の説明をする。診断的評価は、学習活動の事前
に実施され、学習活動に入ることが可能かどうか、前提として子どもが持つ学力を調べ、実態に応じた指導法を考えるためのものである。形成的評価は、学習活動の進行中に実施され、学習課題の到達度や理解度を子どもに知らせると同時に、教師自身に対して指導法が適切かどうかをフィードバックするという目的をもつものである。総合的評価は、単元・学期・学年の終わりに実施され、成績を決定するとともに指導計画全体の反省と改善を行うためになされるものである。三つの評価は、一般的に、それぞれの時期に既成あるいは教師作成のドリルなど、「テスト」を行った結果を判断材料とすることになっており、例としてノートはあげられていない。

ノートが時期に応じた評価の材料とされていない理由は一体何であらうか。理由の一つに、ノートがすぐに過去のものとなってしまう、ということが考えられる。「診断的評価」では、様々な単元に依りて学力を調べる必要がある。子どもたちのノートを見て学力を知ろうとしても、そこに書かれたことは過去のものであり、今、これから行う単元に必要な学力が、どの程度あるか判断することは難しい。したがって学力の実態に応じた指導法をノートから判断することも困難である。また、「総合的評価」は、単元・学期・学年の

終わりに実施されるものであるため、ノートを評価材料にする場合、最後になってノートを見ることになる。それでは時間がたちすぎているため正確な判断は難しく、また子ども全員について到達度や理解の差を知ることが時間的にも不可能である。たとえ素晴らしい考えをノートに書くことができていても、時間がたっているとそれが子ども自身の考えなのか友だちの意見なのかも判断しにくく、本当に理解できているかどうかもわからないのである。教師の指導が適切であったかどうか不明確である。

それでは、学習活動の途中で行う「形成的評価」の材料としてはどうであるか。ノートはすぐに過去のものとなってしまいが、毎回授業後にノートを集め、子どもの考えなどを取り上げれば、それは生きた材料となり、授業に生かすことができる。評価基準をきちんと決めておき、記憶の新しいうちに点検すれば、適切な評価も可能であり、さらにテストでは測ることできない単元への意欲や豊かな発想も知ることができる。子どものノートからつまずきや進行状況を知り、授業の進め方が適切か判断し、授業の方法をそれに応じて変えること、すなわち教師の授業への自己評価と改善ができるといえよう。

先に不向きだと述べた診断的評価や総括的評価でも、評価が必要な時期に初めてノートを見るのではなく、日頃からこまめに点検を

し、評価をストックしておけば、診断的評価の材料にも、最後の総合的な評価の材料にもすることができにちがいない。教師が毎回の点検を積み重ねることによって、普段から子どもの力を把握しやすい、常に自己の授業を振り返ることができる、という利点もあるのである。

教師が子どもの評価をするとき、ノートそのもの（ていねいに書けているか、宿題が行われているか等）を評価の対象にしない限り、ノートが評価材料になることはあまりない。単元の理解度、到達度を調べるときには、時間的に余裕がある点、はっきりとした数字であらわれてくる点からテストを用いやすいが、日頃の教師の努力次第で評価の判断材料の一つとして有効利用できることを常に意識すべきであろう。

③学習の個別化ができる。個を生かすことができる。

様々な学習の中で、特に「読みの学習」は、個人より集団を対象とした授業が多く、しかも数名の児童・生徒中心の話し合いとなってしまうこともある。友達の見いによって自己の考えが深まること、自分ひとりでは解けなかった問題が解けることなどもあるが、一人で考える時間というのは非常に大切で、一人ひとりに読みの活動の

時間が与えられなければ、本物の読解の力はつかないのである。そこで、個別で学習を深める時間として、ノート学習が考えられる。書く、ということは基本的に個人で行う。ノートに書きながら読む活動によって、個人の思考を充実させることができるのではないだろうか。全体の話し合いなどではまわりに流されることもあり、個人追求を深めることは難しいが、ノートでは、自由な発想を思うままに表現することができる。本文を無視したような奇想天外な発想に対しては、教師が本文に戻るよう導かなくてはならないが、良い考えは、さらに深まるよう支援し、できるだけ子ども自身で考える力が付くようにしたい。一度個別学習をして自分の考えを持っていれば、次の段階として、話し合いなどの全体の学習が行われた場合でも、発表の有無に関わらず、個人の読みと比較することができるため、クラス全員が学習に参加ができるのである。場合によっては、課題設定から解決まで、すべてを個別に行う授業も面白いかもしれない。

ノートに個別学習の成果があらわれれば、次はそれを利用して、教師が子ども一人ひとりの個を生かすことも可能である。例えば、授業中発表の場を設けることや、子どもの意見をプリントにして配ることで個が生かされることもあるであろう。クラスの中でいくつかの班を作るとき、読みが同じ子どもで班を作るか、逆に違う読み

の子で班を作るかによっても、違った生かし方ができるであろう。いずれにせよ、個が生きる場というものは、教師が作らなければならない。そのためには、話し合いをする前に必ずノートに自分の意見を書く時間を設けるなど、全ての子どもの個を生かすための下地を作るべきである。

④学習内容を定着させることができる。

ノートは、指示することによって、どの子供も同じ記録を残すことができる。子どもには、理解の速い者、遅い者がいて、それぞれの個性や能力があるため、理解が速いから、理解した内容をいつまでも保持するのかもしれない、必ずしもそうではないし、理解が遅くとも、いったん理解すると忘れることなく、いつまでも記憶している者もいる。ノートは、一斉指導によってこれら能力の違う全ての子供に、同一の知識などを与えることができる。そこから、その記録をどう生かすかは子供たち次第であるが、理解の速度差はあろうとも、同一の学習の手がかりが残ることになるのであるから、子どもに記録したことを活用して学ぼうという意欲があれば、特定領域における学力差（例えば漢字や文法の力、作文の書式の知識など）をなくすこともできるかもしれない。子どもに身に付けさせたい基

礎的・基本的な事項は、板書し、記録をとるよう促すべきである。そして、記録を利用することを教え、定着したかどうか確認するのも教師の役目である。

ノートは、同じ記録を残すこともできる利点がある一方で、全く同じ授業を受けても、子どもによってノートの中身が大きく異なり、場合によっては理解のされかたまでも異なってしまうことがある。

『学ぶということ 大村はまの国語教室3』大村はま（一九八四年九月 小学館）の中で、大村は次のような体験談を述べている。（傍線は宮下による）

「学習記録をよく見ておりましたから、その学習記録に、私が話した話書かれていました。それを見ますと、私の話したことと違っている人もいますし、だいたい合っているも、力点が違っていることがあるのです。おおぜいに誤解されている場合、自分はいったい、どんな話をしたかと、原因をさぐりました。どういう順序が誤られにくいのか、考えてみることができました。どういう学習記録によって、子どもの学力を見ることができずし、自分の反省をすることもできませんでした。学習記録というのは、怖いものでして、先生の失敗をいかにかわしているといえると思

います（笑い）。学習記録は冷や汗をかきながら見ました。「あのことを、この人がこうとったのか」と思いますと、ほんとうに悲しかったですね。どうしたのか、なぜなのかと思って、心配いたしました。ですから、学習記録は、教師が自戒していくためにも大切になってびきでした。」

このように、同じ授業を受けても、同じことを学んだとはいえないことがある。学ばせたいことを教えるには、まずは教師がわかりやすい話し方、授業をすることが基本であるが、話をとらえる力、とらえたことを書く力には個人差がある。子どものノートから学習の理解度、教師自身の授業改善の方向を知り、プリントやワークシート等の併用によってノート指導の効果を高める工夫が必要である。

⑤書写・作文の下地、定着に役立てることができる。

『国語科学習指導の改善と課題』渡辺富美雄（一九八八年五月 国士社）で、渡辺は次のように述べている。

学校教育の中で、国語科が担うべき教育の範囲は、なんとといっ

ても国語の力をつけることにある。すなわち、文字の読み書きが十分にできることである。…中略…例えば、文章だけを単純に読ませるだけでよいのか、また、漢字だけが書けるようになればよいのかというと、それだけでは国語の力にならない。学んだ文章は読めても、他の文章が読めなければ、学んだことにはならないし、漢字が書けても、実際に使えなければ、何の役に立たないのである。

「実際に使えなければ、何の役に立たない」、つまり、新出漢字指導や書写、作文の授業でいくら言語知識や言語技能を得たつもりでも、実際に使うことができれば本当に力がついたとはいえないのである。文字を書くことは、習慣性の部分もあり、形や筆順などのくせは一度身につけてしまうと、なかなか直すことはできない。しかしそのうち漢字については、一度書けるようになったからといって常に書けるとは限らない。形や筆順、漢字のどちらも繰り返し訓練することが必要である。漢字練習ではないから漢字はあまり使わない、書写の時間ではないから文字を乱雑に書いてもよい、という考えは国語科ではあつてはならないといえる。

言語に関する知識を得る、それを実際に使う、この繰り返し

「訓練」によって言語知識・技能を学習者に定着させるのに有効なのが、ノート指導である。例えば、作文指導や硬筆書写指導の時間にきちんとした例を示すことはできても、期間をあげずに何度も繰り返し定着させることは難しい。限られた国語の時間の中で、さらに作文指導、書写指導の時間は限られているためである。日々のノート指導は、作文、書写の下地として、あるいは指導の定着として有効である。ノート指導を行うことで、書く機会を増やすだけでなく、子どもの誤りを早期に発見し、直すこともできるであろう。

おわりに — ノート指導の実践を始めて —

卒業し、小学校四年生の担任となり、半年が経とうとしている。

四月当初、ノート指導に力を入れようと決意していたが、なかなか思うようにはいかず、二学期になりようやく指導にとりかかれるようになった。今の私にできることは限られているが、二回に一回のペースでノートを回収し、コメントと評価を加えて返すようにして

いる。よく取れているノートは子どもたちの見本にし、教師の授業記録としても活用させてもらっている。論文で述べたような機能と意義を生かされてはいないが、評価基準を子どもたちに示したことで、一学期にはない工夫が見られるようになった。教師による評価にやりがいを感じ、毎回ノート作りに意欲を燃やす児童も出てきた。返却されたノートを見て、「やった。」とガッツポーズを決める者もいる。

しかし、まだ「なんで書かなければならないのか」と疑問に思い、いやいや書いている児童、まったく書かない児童がいることも事実である。今後は、いかにそういった疑問や、苦手意識を持つっている児童に、ノートへの意欲を持たせるかが課題である。ノート作りに意欲を燃やす児童は概して作文の力も読解の力もあるようだが、力があるからノートを作ることができるともいえる。どちらが先とは言い切れないが、ノート作りの訓練をする中で、力のある者はさらに、苦手な者は少しずつ、国語の力を高めていってほしいと思う。評価がきっかけになることはある。しかし、最終的には評価されるから書くのではなく、自分のために書く、そんなノート指導をめざしたい。